

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02932

研究課題名(和文) 第一次大戦期・革命期ロシアにおける立憲体制の崩壊とリベラル

研究課題名(英文) The collapse of the constitutional regime and the liberals in the First World War and the Revolution in Russia

研究代表者

池田 嘉郎 (Ikeda, Yoshiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：80449420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来、ロシア革命研究において十分に注目されることがなかった自由主義者について、第一次世界大戦期から革命期にかけての活動を全面的に再検討した。第一次大戦中の自由主義者の言論活動、帝政政府との関係、革命期における臨時政府内での活動などについて、具体的に検討を行った。その結果、第一次大戦中から革命期にかけて、自由主義者の活動自体が、彼らが理想とする立憲主義とは異なった方向性を帯びざるを得なかったことを明らかにした。とくに議会の回避という彼らの革命中の姿勢は、ボリシェヴィキ政権後にも全般的な傾向としては引き継がれるものであった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to analyze the role played by the Russian liberals in the First World War and the Revolution of 1917. In the historiography it is often mentioned that the liberals aimed to introduce a constitutional and parliamentary order in Russia. However, my research made clear that, though they were eager to promote the status of the parliament during the war, after the collapse of the imperial government the liberals themselves tried to govern the country without institutionalizing a parliament. Such an attitude was forced by the extraordinary situation of the war, at the same time it also demonstrated the difficulty with which to stabilize a constitutional and parliamentary order in Russia of the early 20th century, in which a corporative order of society had been stably maintained.

研究分野：近現代ロシア史

キーワード：ロシア革命 第一次世界大戦 リベラル ソ連 ボリシェヴィキ 社会主義 カデット ロシア帝国

## 1. 研究開始当初の背景

従来の研究史においては、1906年の憲法制定から1917年3月の帝政崩壊にいたるロシア政治史の展開を、専制政府対リベラルという枠組みでもっぱら理解してきた。憲法の効力をできるだけ制限したい皇帝ニコライ2世とその政府に対して、憲法の実質化を求めるリベラルが対抗するという構図である(たとえば A. Я. Аврех, Царизм и IV Дума, 1912-1914 г. г. [アヴレフ『ツァリーズムと第四ドゥーマ、1912-1914年』], M., Наука, 1981)。

だが、この研究史には三つの問題点がある。第一に、リベラルは、時期によっては憲法で規定された体制の擁護ではなく、その変更を求めるような強力な運動を展開したということである。とりわけ第一次大戦中はそうであった。たとえば当時彼らが選択肢の一つとして考えていた議院内閣制は、憲法規定を超えるものであった。第二に、1917年3月に帝政が倒れ、リベラル自身が臨時政府をつくってからの展開が、それ以前の展開とどのようにつながっているのかが明確ではないということである。研究史上、帝政崩壊後の社会主義者については分析が進んでいるが、リベラルが1917年にどのような憲法秩序を追求したのかは論じられてこなかった(たとえば William G. Rosenberg, *Liberals in the Russian Revolution: The Constitutional Democratic Party, 1917-1921*, Princeton, Princeton University Press, 1974 にはそうした弱さがある)。実際には1917年3月以降、リベラル主体の臨時政府は、それまでであった憲法の効力を停止し、議会の活動再開にも反対した。また臨時政府は議会に対して責任を負うことのない超越的な革命権力であるとも位置づけられた。つまり1917年のリベラルは、かなりの程度まで反立憲的に振舞ったと考えることができるのである。ここから、第一次大戦期と革命期(おおむね1917年2月～1918年初頭)とを、リベラルによる立憲体制に対する攻撃という点で連続的に捉えることもできる。第三に、リベラルの動向がもっぱら一国史的に理解されてきたということである(例外は И. В. Алексева, *Агония сердечного согласия. Царизм, буржуазия и их союзники по Антанте. 1914-1917*, Л., Лениздат, 1990 だが、ロシア側史料中心である)。

研究史に関する以上の整理を踏まえ、本研究は、第一次大戦期および革命期を、ロシア立憲体制の崩壊として一貫的に捉えることを目指した。その過程においては、反憲法的な姿勢をとっていた専制政府とともに、リベラルもまた主導的な役割を果たしたというのが、本研究が実証すべき仮説である。この仮説は十分に論証されたものとする。分析においては、ロシア・リベラリズムに対する西欧諸国の影響や、相互の交渉に特別の注意を払った。

## 2. 研究の目的

1において研究史上の三つの問題点について示したが、それについてあらたな観点からの解明を行なうことが、本研究計画の中心的な部分をなす。

あらためて記すと、第一の問題点は、立憲体制擁護を掲げるリベラルが、第一次大戦中には憲法に規定された秩序の変更をむしろ求めたということ、説明しなければならないということであった。この点について解明するために、リベラルの動向を跡付け、さらに政府、国家評議会(上院)、国家ドゥーマ(下院)の日常的な運営形態を、立憲体制の崩壊というあらたな観点から明らかにする。リベラルの動向の検討においては、立憲民主党(カデット)をはじめとする諸政党の中央組織と地方組織の活動にくわえ、政党に属していると否とを問わず広範な知識人の評論なども分析する。

第二の問題点は、1917年3月に帝政が倒れて以降、リベラルがいかなる憲法秩序を追求したのかが明確ではないということであった。この点について解明するために、革命期におけるリベラル、および彼らが大きな役割を果たした臨時政府における、国制や憲法をめぐる認識や行動を体系的に分析する。一方においては国家ドゥーマの停止、臨時政府への超越的権力の付与など、リベラルは立憲体制とは逆方向の基本方針をとった。だが、他方では彼らは、憲法制定会議によって導入されるべき新しい秩序について活発な議論をかわした。臨時政府付属司法審議会ほか、諸機構の内部文書や法令草案などを手がかりとして、国制や憲法に対する1917年のリベラルの理論と実践を解明する。その際、多民族国家ロシアの統治に関して、リベラルおよび臨時政府がどのような国制を考えていたのかにも注意を向ける。

第三の問題点は、ロシア・リベラルの動向が一国史的にのみ理解されてきたということであった。これに対して本研究では、第一次大戦期および革命期におけるリベラルとイギリスやフランスなど連合国の関係について、ロシア側史料だけではなく、これまであまり使われてこなかった英仏側の史料も用いて明らかにする。また、リベラルがイギリスやフランス(第三共和政)をはじめとする諸外国の国制を参照していたことに着目する。リベラルおよび臨時政府に対して、連合国の諸代表が国制のあり方についていかなる助言を与えたのかも明らかにする。

以上の三つの点に着目することで、第一次大戦期から革命期までを、ロシアにおける立憲体制の崩壊という観点から統一的に把握する。諸々の機構や集団の動向について、公刊史料とアーカイヴ史料とを用いて偏りなく解明することによって、立憲体制を標榜するリベラルこそが、その崩壊において主導的な役割を果たしたという仮説を実証するこ

とを目指す。

### 3. 研究の方法

第一次世界大戦期および革命期のロシア・リベラルについて、国際的水準に照らしても決定版とみなせるような研究成果を得ることを目指す。そのための最も大事な要件は、用いる史料の網羅性および全体としてのバランスである。研究計画においては、調査対象となる史料をその出所に応じて「政府・公的機関」「政党・民間団体」「個人」の3つに区分し、さらにそれぞれを「公刊史料」と「アーカイブ史料」に分ける。これらの区分は、主にロシアにおける史料の所在形態に対応している。くわえてロシアだけではなく、イギリスとフランスのアーカイブでも調査を行なうことによって、一国史を超えた観点を獲得する。また、国際学会での報告を定期的に行なうことによって、研究の進捗、方向性、水準について客観的に確認するための指標を得る。

主要な史料となるのは、ロシア連邦国立アーカイブ(ГАРФ)所蔵の立憲民主党、ミリュコフ、ココシキン、臨時政府関連の史料である。とくに臨時政府付随法制審議会の会議録が重要である。また、2017年度には東京大学において、Gale社の提供になるArchives Unboundシリーズのうち、イギリス外交文書館の1914-18年の英露関係の史料がオンラインで読めるようになったので、これも活用した。

### 4. 研究成果

第一次世界大戦期に関しては、総力戦体制の構築に対するリベラルの関与を、言論と実践の両レベルで明らかにした。そうした関与が顕著に見られたことは、従来からも指摘されていたが、リベラルの言論活動における民衆の政治関与への忌避、外国の総力戦体制からの影響について、従来にない観点・史料から(リベラルの用いる「公共」概念の閉鎖性、ナボコフによるイギリス調査)明らかにした。

ロシア革命期に関しては、ロシア連邦国立アーカイブの所蔵文書を体系的に用いて、臨時政府内のリベラルによる法制部門での活動について広汎に解明した。身分制の廃止が困難であったこと、議会制の早期導入にリベラル自身が否定的であったことなどを実証的に解明した。とくに議会制については、臨時政府は非常権力であるという法的な規定にリベラルが厳格にこだわった結果、かえってそうした権力のもとでは議会は導入できないという結論に彼らが達したことを明らかにした。ここには法の支配にこだわることでリベラルが、かえって法秩序の基礎となる議会の導入に否定的となったという逆説が見られる。また、ロシア社会に根強く残るコーポラティズム(身分制など)が、リベラルが打ち出した議会の代替物の構成に強い影響を与えていることも明らかにした。西欧の

議会主義・立憲主義を奉じるリベラルも、ロシア社会の構造から自由にはなれなかったのである。議会を導入せず執行機関(臨時政府)に権限を集中させる傾向、コーポラティズムと代議制を折衷させる傾向は、十月革命で臨時政府が倒され、ポリシェヴィキ権力ができたのちも、むしろ強まっていくのである。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

池田嘉郎、ロシア革命研究の最先端 各国の歴史家はどう見ているのか、ユーラシア研究、査読無、57号、2018年、pp. 3-8

Ёсиро Икэда, Проект японских историков Российской революция и век СССР (日本の歴史家のプロジェクト『ロシア革命とソ連の世紀』), Историческая и социально-образовательная мысль (歴史・社会教育思想), 査読無, Vol. 9, No. 5/1, 2017, pp. 13-21

オープンアクセス  
(<http://www.hist-edu.ru/hist/article/view/2818/2694>)

池田嘉郎、和田春樹のロシア革命史研究をめぐって 複合革命と「世界戦争の時代」、初期社会主義研究、査読無、27号、2017、pp. 76-86

池田嘉郎、ロシア革命からソ連へ 実現したユートピアの歴史、思想、査読無、1123号、2017、pp. 129-135

池田嘉郎、マリヤ・ココシキナの手記、現代思想、査読無、Vol. 45-19、2017、pp. 116-123

池田嘉郎、世界史の中のロシア革命、歴史地理教育、査読無、871号、2017、pp. 4-9

池田嘉郎、地域の歴史としての社会主義、世界史像の再構成(現代歴史学の成果と課題第4次 2)、査読無、2017、pp. 180-193

池田嘉郎、ロシア革命は兵士を市民にしたのか、早稲田大学高等研究所紀要、査読無、9号、2017、pp. 106-109

池田嘉郎、トルストイ『戦争と平和』とロシア社会—祖国戦争100周年と第一次世界大戦に見る、SLAVISTIKA、査読有、Vol.31、2016、pp. 195-211

Yoshiro Ikeda, From the Meiji Emperor's Funeral to the Taisho Emperor's Coronation: Reporting the Japanese Imperial System in the Russian Press, in Kimitaka Matsuzato, ed., *Russia and Its Northeast Asian Neighbors China, Japan, and Korea, 1858-1945*, Lanham: Lexington Books, 査読無, 2016, pp. 137-150

池田嘉郎、交差する日本とロシアの軌跡 一九〇五-一九四五年、東郷和彦、A. N. パノフ編、ロシアと日本 自己意識の歴史を

比較する、東京大学出版会、査読無、2016、pp. 107-128

Yoshiro Ikeda, *The Homeland's Bountiful Nature Heals Wounded Soldiers: Nation Building and Russian Health Resorts during the First World War*, in Adele Lindenmeyr et al., eds., *Russia's Home Front in War and Revolution, 1914-1922. Book 2. The Experience of War and Revolution*, Bloomington: Slavica, 査読有、2016, pp. 201-220

池田嘉郎、第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識 カデットを中心にして、ロシア史研究、査読有、97号、2016、pp. 27-42

〔学会発表〕(計9件)

Yoshiro Ikeda, *The Crisis of Representation of the Sovereign in the Russian Revolution*, at Slavic-Eurasian Research Center 2017 Winter International Symposium, 2017年12月8日、北海道大学スラブ研究センター

Yoshiro Ikeda, *The Provisional Government and the East Within and Outside Russia*, at The Asian Arc of the Russian Revolution: Setting the East Ablaze? 2017年11月16日、Yale-NUS College (シンガポール)

Ёсиро Икэда, *Временное правительство как правительство войны и революции*(戦争と革命の政府としての臨時政府)、ロシア史研究会年次大会、2017年10月15日、東京大学駒場キャンパス

池田嘉郎、ロシア革命は兵士を市民にしたのか、国際シンポジウム「軍事的エトスの近代化」、2016年7月24日、早稲田大学

Ёсиро Икэда, *Проекты установления республиканского строя в 1917 году: дискуссии о президентстве и парламенте* (1917年における共和制確立の諸案:大統領制と議会制をめぐる議論), at X международный коллоквиум по российской истории Эпоха войн и революций (1914-1922) (第10回国際ロシア史コロキウム「諸戦争と諸革命の時代(1914-1922)」)、2016年6月9日、ヨーロッパ大学(ペテルブルグ)(ロシア)

Yoshiro Ikeda, *Time and the Comintern: Rethinking the Cultural Impact of the Russian Revolution on Japanese Intellectuals*, at The Third Annual Conference of the Graduate School for East and Southeast European Studies: The Culture of the Russian Revolution and Its Global Impact: Semantics-Performances-Functions、2016年6月4日、ミュンヘン大学(ドイツ)

Yoshiro Ikeda, *The Quest for the Republican Regime in the Russian*

*Revolution*, at 22 International Congress of Historical Sciences、2015年8月25日、濟南(中国)

Yoshiro Ikeda, *Disabled Soldiers and the Bolshevik Regime*, at ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IX World Congress、2015年8月7日、千葉市(日本)

Yoshiro Ikeda, *Russian Health Resorts and Visions of an Empire during the First World War*, at ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IX World Congress、2015年8月6日、千葉市(日本)

〔図書〕(計7件)

松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、他編、岩波書店、越境する革命と民族(ロシア革命とソ連の世紀5)、2017、pp. xii+316+10

松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、他編、岩波書店、人間と文化の革新(ロシア革命とソ連の世紀4)、2017、pp. xii+314+16

松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、他編、岩波書店、冷戦と平和共存(ロシア革命とソ連の世紀3)、2017、pp. xii+302+10

松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、他編、岩波書店、スターリニズムという文明(ロシア革命とソ連の世紀2)、2017、pp. xii+316+8

池田嘉郎責任編集、岩波書店、世界戦争から革命へ(ロシア革命とソ連の世紀1)、2017、pp. xii+316+8

池田嘉郎、岩波書店、ロシア革命 破局の8か月、2016、256

池田嘉郎・草野佳矢子編、刀水書房、国制史は躍動する——ヨーロッパとロシアの対話、2015、341

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 嘉郎 (IKEDA, Yoshiro)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授  
研究者番号：80449420

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )